

日本音楽学会 2024 年度音楽関係学術イベント開催助成金（第 2 期採択）

ブルックナー生誕 200 年記念イングリット・フックス教授特別講演会

「ウィーンの音楽生活におけるブルックナーの位置、およびその交響曲の受容について」

報告記

池上 健一郎

本企画は、アントン・ブルックナー（1824～1896）の生誕 200 年を記念した、イングリット・フックス教授による特別講演会である。2024 年 11 月 23 日（土）の 14 時から 16 時半にかけて、企画者の本務校である京都市立芸術大学を会場として開催し、Zoom によるライブ中継も行った。事前申込制としたところ、85 名の申し込みがあったが、当日の参加者は、会場 48 名、Zoom が 22 名の計 70 名であった。偶然というべきか、不運というべきか、同日の同時間帯に、京都コンサートホールでブルックナーの《交響曲第 8 番》の演奏会（井上道義指揮／京都市交響楽団）があったことが、実際の来場者の減少に影響したのかもしれない。それでも、多くの方に関心を持っていただけたことは、素直に嬉しく思う。

講演者であるフックス氏は、1981 年から 1999 年まで、オーストリア学術アカデミーの研究員およびリンツ・アントン・ブルックナー研究所（ABIL）の所員、1999 年から 2019 年まではウィーン楽友協会アーカイヴの副所長を務められたオーストリアの音楽学者で、ブルックナーをはじめとするドイツ語圏の作曲家や、オーストリアの音楽文化に関して、これまで多くの著作を発表されている。ちなみに、ご本人いわく、ウィーン生まれ、ウィーン育ちの生粋の「ウィーン子」とのことだ。

講演タイトルは、「ウィーンの音楽生活におけるブルックナーの位置、およびその交響曲の受容について」（原題：*Bruckners Stellung im Wiener Musikleben seiner Zeit und die Rezeption seiner Symphonien*）。ブルックナーの音楽家としてのキャリアを時系列的に紹介するとともに、ウィーンという独特の性格を持った都市において、彼の交響曲がどのように受容されていったかを多角的に論じる内容で、ブルックナーが「交響曲作家」として成功を掴み取った軌跡が、聴衆に対して分かりやすく提示された。全体としては、概論的、啓蒙的性格が強かったが、それは学生を含む幅広い聴衆層を想定してのことだろう。企画者としては、ABIL の所員としてブルックナー研究の中心におられた氏ならではの話も聞きたかったというのが、正直な感想ではある。それでも、田舎出身の素朴で敬虔な「神の楽師」、あるいは当時

は理解されず、不遇をかこった作曲家という、現在まで根強く残るクリシェに対して厳しい批判の目を向けつつ、同時代の文脈においてブルックナーという交響曲作家を捉えようとした本講演は、21世紀のブルックナー研究の基本方針を反映しており、学術的に見てもじゅうぶんに有意義なものであったと言えるだろう。なかでも、「貧しくて誤解された作曲家という、すでに生前から広まっていたステレオタイプがもはや賞味期限切れ」であり、「むしろそれは、ロマン主義的な芸術家のイメージを正当化するために、ブルックナー本人と、特にその信奉者たちが意図的に作り出したお決まりのイメージだった」というフックス氏の指摘は重要である。

講演会は、聴衆が少しでも理解しやすいように、またできるだけ集中力を保てるようにとの配慮から、内容にしたがって17のセクションに分け、セクションごとにドイツ語の原稿と日本語訳の読み上げを小刻みに交替する形で進めていった。また、各セクションのキーワードを記したスライドを企画者が作成し、スクリーンに投射した（Zoomでは画面共有）。講演は、10分の休憩時間を挟んで2時間15分ほど。残りの15分は、事前に寄せられた質問に、フックス氏が答える時間に充てた。講演が長引いてしまったため、その場での質問を受け付ける時間が取れなかったことが心残りである。

もともと本講演の企画は、フックス氏とかねてから親交があった武石みどり氏（東日本支部／東京音楽大学）からのご提案がきっかけとなって始まったものである。武石氏は、フックス氏を紹介してくださったうえに、企画実現のための資金集めにも奔走してくださった。紅葉シーズン真っ盛りでホテル代が高騰する時期に、京都で講演会を行うことができたのは、ひとえに氏の全面的なサポートのおかげである。心から感謝申し上げる。また、会場の設営、受付など、献身的に協力してくれた岡本雄大さん（京都大学人間・環境学研究科博士課程）と前田依泉さん（京都市立芸術大学音楽学専攻3回生）にも感謝したい。特に前田さんは、原稿の読み上げが不得手な企画者に代わって、日本語訳の読み上げを立派に、そして見事に務め上げてくれた。

なお、本講演原稿の日本語訳は、今年度の京都市立芸術大学音楽学部・大学院研究紀要『ハルモニア』第55号（2025年3月発行）に掲載される予定である。